

序

漆紙文書というともっともらしい名称だが、漆容器の蓋紙に再利用した公文書などの反古が、付着した漆により保護されて残ったもので、東北地方の城柵官衙遺跡からの出土例がよく知られている。しかし、日本で最初に漆紙文書が発見されたのは実は平城京跡であり、当研究所が継続的に調査を行っている平城宮・京跡から出土した漆紙文書は少なからぬ量になってきた。

今回、新しいシリーズとして、『平城京漆紙文書』の刊行を企画することにした。都城出土の漆紙文書のまとまった報告書としては初めてのものであり、しかも最新の赤外線撮影技術を駆使した図版によって、漆紙文書の神髄をお伝えすることができると思う。今回の刊行が契機となって、漆紙文書研究に新しい飛躍がもたらされるのであれば、これに勝る喜びはない。また、今後発見例の増加によってさらにシリーズを充実したいと考えている。

今回の報告書には、奈良国立文化財研究所が大和郡山市教育委員会と共同で行った平城京跡右京八条一坊十三・十四坪の調査で出土した多数の資料を収録することができた。掲載について快諾をいただいた大和郡山市教育委員会に対し、深甚の謝意を表す。また、刊行にあたっては、奈文研在職中から平城宮・京跡出土漆紙文書の調査・研究を推進してこられた名古屋大学の古尾谷知浩助教授（奈良文化財研究所調査員）に多大のご尽力をたまわった。ここに記して謝意を表する次第である。

二〇〇五年一月

独立行政法人文化財研究所
奈良文化財研究所長

町田章